



第3回聴覚障害者医療研究集会 抄録集

2017年2月11日(土・祝)
大津市旧大津公会堂 3階 ホール

主 催：聴障・医ネット（聴覚障害者の医療に関心をもつ医療関係者のネットワーク）
聴覚障害をもつ医療従事者の会
後 援：一般財団法人全日本ろうあ連盟、一般社団法人全国手話通訳問題研究会





第3回聴覚障害者医療研究集会 開催要項

【日時】2017年2月11日(土・祝) 10時～16時(9時30分受付開始)

【会場】大津市旧大津公会堂 3階 ホール(滋賀県大津市浜大津1-4-1)

京阪電鉄「浜大津駅」より徒歩1分、

JR 琵琶湖線(JR 東海道線)「大津駅」より徒歩約15分

【内容】

10:00～12:00 特別講演～琵琶湖病院聴覚障害者外来の24年～ 藤田 保氏

12:00～13:00 昼休み

13:00～聴障・医ネットからの報告

13:10～15:30

熊本地震 聴覚障害者支援イベント 活動報告

演題発表

16:00 終了

【参加費】(抄録集付き)

会員 3,000 円 非会員 4,000 円(手話通訳とパソコン要約筆記がつきます)

【趣旨】

聴障・医ネットは、聴覚障害者の医療問題を考える医療関係者たちの全国的なネットワーク組織です。1996年の設立以降、聴覚障害者の医療に関心を持つ医療関係者間の情報交換、並びに交流を行うこと、ならびに災害等発生時において、聴覚障害者およびその関係者に対する医療支援の協力ができるようにすることを目的に、関連団体と連携して活動してきました。

第3回研究集会は聴障・医ネットの設立時にご尽力いただいた藤田保氏を講師にお招きし、「琵琶湖病院聴覚障害者外来の24年」と題してお話ししていただきます。午後からは、熊本地震の聴覚障害者支援イベント活動報告と演題発表を行います。

日ごろ聴覚障害者や手話通訳者とともに活動されている医療者の方々はもちろん、聴覚障害者への医療支援・情報提供について少しでも関心をお持ちの医療関係者の方々、聴覚障害者・手話通訳者の方々のご参加をお待ちしています。

<お願い>

昼食は、会場周辺のレストランを利用するか、弁当持参でお願いします(会場内で飲食可、近くにコンビニあり)。

<企画・運営>

聴障・医ネット、聴覚障害をもつ医療従事者の会

<連絡先>

聴障・医ネット 事務局担当 高田 智子

事務局：〒263-0016 千葉市稲毛区天台3-11-1 高田方

FAX (043) 251-1975 E-mail: deaf.mednet@gmail.com

<http://homepage3.nifty.com/deaf-med-net/>



10:00

開会 挨拶 聴障・医ネット 代表 平野 浩二

特別講演

座長 片倉 和彦

「琵琶湖病院聴覚障害者外来の24年」

講師 藤田 保 氏

～休 憩～

13:00

聴障・医ネットからの報告

13:10

特別報告

熊本地震 聴覚障害者支援イベント 活動報告

片倉和彦氏（精神科医師）、村岡由佳里氏（看護師）

13:50

～演題発表

座長 村上 旬平

1. 米国ロチェスターにおけるろう者を対象にした文化言語モデルによる保健医療の取り組みと課題

○皆川愛（聖路加国際大学大学院博士前期課程）

高山亨太（ギャローデット大学）

～休 憩～

14:40

座長 北原 照代

2. 聴覚障がい者の医療機関での受療配慮のための聴覚障がい者と医療関係者とのコミュニケーションツール作成についてー漫画によるお願い手帳ー

○俵口 奈穂美（北九州市立医療センター）野口 万里子

安藤美紀（NPO 法人 MAMIE）

3. 聴覚障害者に向けての情報発信

ーFacebook, YouTube などの SNS 活用ー

○平野浩二（聴覚障害者医療サポート協会）

16:00 終了



聴障・医ネットは、聴覚障害者の医療問題を考える医療関係者たちの全国的なネットワーク組織です。1996年の設立以降、聴覚障害者の医療に関心を持つ医療関係者間の情報交換や交流を行うこと、並びに災害等発生時において、聴覚障害者およびその関係者に対する医療支援の協力ができるようにすることを目的に、関連団体と連携して活動しています。



主 催 者 挨 拶

聴障・医ネット 代表幹事
平野 浩二

本日は、第3回聴覚障害者医療研究集会にお集まりいただきありがとうございました。第1回は大阪、第2回は東京、そして今回再び関西にもどり、滋賀県大津市を会場として開催いたします。

思い起こせば、「聴障・医ネット」は、全国手話通訳問題研究会（以下、全通研）並びに全日本ろうあ連盟とともに歩んできました。平成7年阪神大震災をきっかけに、手話を学ぶ医療者が定期的継続的に活動する必要性を感じ、結成されました。全通研集会の会場を間借りし、全通研の元で、20年にわたり議論を積み重ねてきました。より多くの医療従事者に、聴覚障害者の医療問題に取り組んでももらいたい。そのような志から、全通研から独立し、この集会を企画しました。聴覚障害をもつ医療従事者の会との共催で、今年が第3回目の集会になります。

滋賀県と言えば琵琶湖。琵琶湖と言えば、藤田保先生です。琵琶湖病院に日本で初めての「聴覚障害者外来」を開設し、多くの聴覚障害者の診療にあたってきました。「滋賀県の開催なら、藤田先生に記念講演をお願いするしかないでしょう。」早々と藤田先生に講演の承諾をもらっていました。そんなおり、第一生命保険が主催する第68回「保健文化賞」を藤田先生が受賞したという朗報が飛び込んできました。藤田先生自身が中途失聴の医師であり、自ら手話を用いて聴覚障害者の精神疾患の診療に長年取り組んできたことを評価されてのことです。「琵琶湖病院聴覚障害者外来の24年」というテーマで講演していただきます。先進的な取り組みであり、多くの苦労もあったに違いありません。藤田先生の生きざまを聞けることを楽しみにしています。

昨年起こった熊本大地震。被災した聴覚障害者を支援するために、聴障・医ネットから医師と看護師を派遣し、支援イベントを行いました。聴障・医ネット結成の最大の理由が、聴覚障害者の災害支援です。今回、熊本支援に奮闘してくれた片倉医師、村岡看護師より、その特別報告をしていただきます。

午後の発表は、演題が3題と少ないのが残念ですが、各地域のすぐれた取り組みを学べます。ここで学んだことを、自分の地域に持ち帰り、その地域の活動の活性化への布石へとなってくれることを望んでいます。

それでは一日頑張っていきましょう。



【特別講演】

「琵琶湖病院聴覚障害者外来の 24 年」

講師 藤田 保 氏

講師プロフィール

広島市生まれ。1975 年京都府立医科大学卒業。

同大学附属病院精神神経科に勤務。2 年後に聴神経疾患にて聴覚障害を負う。

1978 年から琵琶湖病院に勤務する傍ら、大津手話サークルで手話の学習を開始、滋賀県中途失聴難聴者協会の設立に参画。

1993 年 4 月から琵琶湖病院にて聴覚障害者外来を担当、現在に至る。

1996 年の聴障・医ネット創立メンバー。

2001 年 3 月から社会福祉法人滋賀県聴覚障害者福祉協会理事長。

聴覚障害をもつ医療従事者の会設立に参画、2007 年まで代表幹事を務められた。

祝「保健文化賞」受賞！

藤田氏は、2016 年 10 月に第 68 回「保健文化賞」（主催；第一生命、後援；厚生労働省他）を受賞されました。

＜受賞理由＞

「聴覚障がいを持つ医師として、福祉施設での精神保健相談や、勤務する病院で聴覚障がい者外来の実践、学生への教育などを行うことで、聴覚障がい者の精神保健や福祉の向上に貢献した」

米国ロチェスターにおけるろう者を対象にした 文化言語モデルによる保健医療の取り組みと課題

○皆川愛（聖路加国際大学大学院博士前期課程）、高山亨太（ギャローデット大学）

1. 背景と目的

ろう者は、聞こえにくい・聞こえない障害により、音声言語を媒介とする社会において医療関連の情報授受やコミュニケーションに制限を受けやすく（Pollard et al, 2009; Napier et al, 2013）、また結果的に医療受診抑療につながりやすいとされている（北原ら, 1997）。欧米において、ろう者は医学的側面としての聴覚障害者というよりは、手話を第一言語とし、ろう文化を持つ少数言語文化民族として捉える文化言語モデルが普及しつつある（Sheridan & White, 2008）。文化言語モデルの観点に沿った実践例として、手話でがん検診や HIV の予防法に関する情報発信や、ろう者同士によるピア相談によって、がん検診受診率が増加したり、HIV の対処行動が取れるようになったこと（Harry et al, 2012; Rohleder, 2009）や、手話通訳を利用して受診することで、受診の満足度が上がる

（O’Heam, 2006）ことが報告されている。このように、ろう者を文化言語モデルの観点で理解し、保健医療サービスを実践することは意義があると考えられるが、具体的な実践や課題について詳細は明らかにされていない。

2016 年 3 月 12 日から 16 日まで、ロチェスターでろう・難聴者に関わる医療機関や専門職養成に関わる方々を対象に、ろう者の文化言語モデルによる保健医療実践の取り組みと課題について、半構造型面接を実施した。本発表では、インタビューの結果を報告する。

2. ロチェスターろうコミュニティの特徴

ニューヨーク州に位置するロチェスター市は、全米有数の学術都市であるとともに、学歴の高いろう・難聴者を中心としたろうコミュニティが形成されていることで知られている。市内には、約 140 年の歴史を持つロチェスターろう学校（Rochester School for the Deaf: RSD）、ロチェスター工科大学（Rochester Institute of Technology: RIT）に設置された国立聾工科大学（National Technical Institute for the Deaf: NTID）がある。NTID では、約 1000 名のろう・難聴学生を対象に、理数系の高等教育プログラムを提供しており、保健医療専門職や

理系研究者を目指すろう・難聴者を輩出しやすい学術環境にある。2016 年 8 月より、医療手話通訳に関する修士課程も設置されている。さらに、保健医療専門職養成課程を有するロチェスター大学（University of Rochester）には、地域のろう・難聴者を対象に精神保健サービスを提供しているろうウェルネスセンター（Deaf Wellness Center: DWC）や全米ろう者ヘルスリサーチセンター（National Center for Deaf Health Research: 以下、NCDHR）が設立されている。また、大学付属病院には、ろう看護師やろう医師が手話通訳を活用しながら就労している。

3. DWCと地域貢献

DWC は、地域のろう者を対象に精神保健サービスを提供することを目的に、1999 年に設立された。専門スタッフは、心理療法士 2 名、ソーシャルワーカー 1 名、カウンセラー 1 名の計 4 名である。実践のみならず、研究、教育機能も有している。そのため、実践を通して研究発表を重ねたり、精神保健専門職を目指すろう者のためにインターンシップの機会を提供している。これまでに約 50 名の専門職を目指すろう者のインターン生を受け入れきた。また、ろう専門職や学生が差別解消をもとめて訴えた裁判などにおいて、証言をするなどの支援活動も進めている。啓発教材の開発や評価などにも取り組んでおり、ろう女性を対象にした思春期や更年期教育のアメリカ手話のビデオ資料などを作成し、好評を得ている。地域との協働の観点からの課題としては、ろうコミュニティにおいては、個人情報特定されやすい傾向があり、そのため DWC へのアクセスを望まないろう者もいることである。スタッフが守秘義務を徹底すること、かつグループ療法の参加者には、クライアント同士の個人情報を守秘するためのトレーニングをプログラムの一環として取り入れている。また、聴者を対象にしたプログラムに手話通訳をつける交渉も行っている。

4. NCDHRの取り組み

NCDHR は、全米疾病予防管理センター（Center on Disease Control: CDC）の委託を

受けてろう・難聴者の健康問題に関する研究調査を実施する機関として、2002年に設立された。Community-based Practice Research (CBPR)を基盤として、ろうコミュニティと協働しながら調査研究を展開している。具体的には、ろうコミュニティとの議論から健康問題に関するリサーチクエストを掘り起こし、プロジェクトを計画立案、そして評価までろう者の参加を得ながら調査研究をすすめている。アンケート調査を実施するにあたっては、地域のろう者による手話の監修を受け、また調査結果をまとめるにあたっては、コミュニティミーティングを開催し、フィードバックを得ている。公衆衛生を専門とするろう者も雇用されている。実践の一例としては、1998年から Deaf Strong Hospital という、ろう者が医療者に扮した仮の病院に、聴者の医・薬学生が模擬診察を体験するワークショップを実施しており、医療者の理解の普及に寄与している。

5. 医療手話通訳者の養成課程の設立

米国では、障害を持つアメリカ人法 (The Americans with Disabilities Act: ADA) が施行されたことによって、医療領域における手話通訳の提供が法的に義務付けられ、ろう者にとっても手話通訳のニーズが高い領域として認知されている (National Consortium of Interpreter Education Centers, 2009)。高度な医療手話通訳を提供するためには、特定の技術やトレーニングが求められる (Swabey et al, 2011)。

NTIDは、近年の医療手話通訳に対するニーズの高まりを受けて、現任者対象の短期養成課程に加えて、医療手話通訳に関する修士課程を2016年度から設置した。現任者対象の短期養成課程が、9ヶ月のコースであるのに対して、修士課程は2年にわたるカリキュラムが組まれている。なお、どちらもオンラインによる教育プログラムが中心となっている。CATIE Center (2008) が公表した医療通訳実践Competency (13項目) に基づいて、カリキュラムが組み立てられている。

修士課程を設置した背景の1つに、医療現場における手話通訳に対するニーズの高まりや、また後進育成を担う指導者や研究分析の視点を持つ手話通訳者の養成が求められるようになったことが挙げられている。

6. 考察

インタビューを通して、ろう者を対象にした保

健医療の取り組みに欠かせないのは、1) ろうコミュニティと医療機関との協働であり、かつ2) 文化言語モデルを基本に保健医療サービスを実践すること、そして、3) ろう者の保健医療専門職の養成が重要であり、これらが最終的にろう者への保健医療の向上につながるものと考えられた。

7. 付記

本調査を実施するにあたって、聖路加国際大学国際奨学金の助成を受けた。

8. 参考文献

- 1) Pollard, R. Q., & Barnett, S. Health-related vocabulary knowledge among deaf adults. *Rehabilitation Psychology*, Vol.54, 182–185. 2009.
- 2) Napier, J., & Kidd, M. R. English literacy as a barrier to health care information for deaf people who use Auslan. *Australian Family Physician*, Vol.42, 896–899. 2013.
- 3) 北原照代.聴覚障害者に受療抑制はあるかー手話通訳者を設置した病院の来院状況から. *社会医学研究*, Vol.14, 103-107. 1997.
- 4) Sheridan, M. and White, B. 2008. 「Deaf and hard of hearing」 『Encyclopedia of Social Work』 D, 1-10.
- 5) Harry, K. M., Malcarne, V. L., Branz, P., et al. Evaluating a skin cancer education program for the Deaf community. *Journal of Cancer Education*, Vol.27, 501–506. 2012.
- 6) Rohleder, P., Braathen, S. H., Swartz, L., et al. HIV/AIDS and disability in Southern Africa: A review of relevant literature. *Disability and Rehabilitation*, Vol.31, 51–59. 2009.
- 7) O'Heam, A. Deaf women's experiences and satisfaction with prenatal care: a comparative study. *Fam Med*, Vol.38, No.10, 712-6. 2006.
- 8) National Consortium of Interpreter Education Centers : 「Comparison report: Phases I&II Deaf consumer needs assessment」, 2009.
- 9) Swabey・Nicodemus : 「Bimodal bilingual interpreting in the U.S. health care system: A critical linguistic activity in need of investigation」, *Advances in interpreting research: Inquiry in action*, 241-260, 2011.
- 10) CATIE Center : 「Medical interpreter: ASL-English domains and competencies」, 2008.

聴覚障がい者の医療機関での受療配慮のための

聴覚障がい者と医療関係者とのコミュニケーションツール作成について

—漫画によるお願い手帳—

○俵口 奈穂美（北九州市立医療センター）野口 万里子、安藤美紀（NPO 法人 MAMIE）

1. はじめに

聴覚障害者協会による聴覚障害者が医療機関受療の際に困っていることやその対応を記載したパンフレットや、放射線技師協会による聴覚障害者のための放射線部門におけるガイドラインなどが作成され、聴覚障害者の医療機関での受療配慮についての取り組みが行われている。しかし、聴覚障害者の受療に関する医療機関側の問題（北原照代、峠田和史、西山勝夫、社会医学研究 19、2001）や、聴覚障害者の受療における医療機関側の対応の実態調査（上野裕美他、上野裕美、瀬戸瑠里子、中宗根ありさ、林香里、牧野綾聴覚障害者の受療における医療会館側の実態調査、2004）で報告されているように、聴覚障害者の医療機関での受療の困難さや、医療関係者の聴覚障害者への配慮が不十分であることが指摘されている。一方、医療関係者が聴覚障がい者とのコミュニケーションに不便を感じていることも報告されている（Ralston, E., Zazove, P., & Gorenflo, D. W., *The Journal of the American Board of Family Practice*, 1996）。

これらは、聴覚障がいが見た目に分かりにくい障がいであり、聴覚障がい者と医療関係者とのコミュニケーションが十分に取れていないこともその要因の一つであると考えられる。医療関係者は患者に聴覚障がいがあると気が付かず、また、聴覚障がい者自身も受療の困難さを医療関係者に直接伝えることが難しいため、聴覚障がい者への配慮が改善されていないの

ではないだろうか。

漫画は、言語と映像の中間として位置づけられその分かりやすさ（笹本純 デザイン学研究 特集、1998）が報告されている。今回、聴覚障がい者の医療機関での受療配慮のため、聴覚障がい者と医療関係者とのコミュニケーションツールとして、聴覚障がい者の医療機関での受療の困難さ、その改善のための対応を記載した小冊子—漫画によるお願い手帳—の作成を行った。

2. 方法

平成 28 年 10 月～11 月に聴覚障がい者の医療機関での受療の困難さ、医療関係者への対応のお願い、および聴覚障がい者へ医療機関受診時のお願いを記載した小冊子—漫画によるお願い手帳—作成のための資金調達をクラウドファン্ডにて実施した。その際、聴覚障がい者が医療機関での受療時に困っていること（10 項目）（表 1）の有無についてインターネットによるアンケート調査を行った。病院、薬局で困ったことはどんなことでしたか。あてはまるものにチェックをつけて下さい

-
- ☐ 手話のできるスタッフがいない。
 - ☐ マスクをかけているので、何を話しているか分からない。
 - ☐ 大きな声で話しかけられてもわからない。
 - ☐ 顔をこちらに向けて話してくれないので、何を言っているのか分からない。
 - ☐ 名前を呼ばれても分からない。

- 耳マークが置かれていない。
- 問診票のことが難しい。
- 筆談を頼みにくい。
- 手話通訳者だけに話したり、説明したりする。
- 説明のことが難しい。

(表 1 受療時の困難さについてのアンケート)

アンケート結果を基に、聴覚障がい者の医療機関での受療の困難さ、医療関係者への対応のお願い(図1)、医療関係者から聴覚障がい者へ受診時のお願い(図2)について記載した小冊子—漫画によるお願い手帳—を作成した。



(図1 聴覚障がい者から医療関係者へのお願いイラスト)



(図2 医療関係者から聴覚障がい者へのお願いイラスト)

3. 結果

アンケートの対象となった聴覚障害者は73名で、そのうち病院・薬局で困ったことがあると答えたのは64名(88%)であった。マスクをかけているので何を話しているか分からない(84%)名前を呼ばれても分からない(63%)、大きな声で話しかけられても分からない(46%)、顔をこちらに向けて話してくれないので何を言っているのか分からない(44%)、手話のできるスタッフがいらない(42%)で、他5項目について約20%が困難さを感じていた。

4. 考察

聴覚障がい者の医療機関での受療配慮のため、聴覚障がい者と医療関係者とのコミュニケーションツールとして、聴覚障がい者の医療機関での受療の困難さ、その改善のための対応を記載した小冊子—漫画によるお願い手帳—の作成を行った。今回は、お願い手帳による受療配慮への効果については評価できていないが、お願い手帳はクラウドファン্ড賛同者、聴覚障がい者協会を通じて聴覚障がい者への配布を計画している。また、漫画によるお願い手帳を、病院での医療スタッフへの研修、特に新規採用者への研修教材としての使用も働きかけている。今後、漫画によるお願い手帳の活用を図り、聴覚障がい者、医療関係者へ聴覚障がい者の受療改善のためのコミュニケーションツールとしての漫画によるお願い手帳の有用性について評価を行う必要があると考えられる。

聴覚障害者に向けての情報発信

—Facebook, YouTubeなどのSNS活用—

○平野浩二（聴覚障害者医療サポート協会）

1. はじめに

聴覚障害者は、音声でのやりとりが難しいことより、古くはファックス、その後、携帯電話でのメールによるコミュニケーションがかなり早い段階より普及していた。若い人を中心にスマートフォンの普及は目覚ましいものがある。聴覚障害者の間にもスマートフォンを用いる人は急激に増えているが、文章でのやりとりを苦手とする人が多く、文字中心の利用にはまだまだ大きな壁がある。そんな中で、FACEBOOK、YouTubeなどの画像、動画を中心にしたSNS（social networking service）の広がりはずさまじいものがある。文章を介さなくても十分に楽しめることから、むしろ聴覚障害者に、その利用は広がっているようである。

聴覚障害者の医療問題に関心をもつ人たちは全国に存在する。この「聴覚障害者医療研究集会」がその人たちの集まりであるが、全国に散在する人たちが意見や情報を交換するには、まだまだ多くの壁がある。その壁を乗り越えるために、インターネット（特にSNS）を活用した取り組みを紹介したい。

2. 講演会の宣伝

聴覚障害者医療サポート協会では、毎年講演会などの企画を行っている。

H27年には「手話で語るろう者のがん体験講演会」を企画した。3人のろう者ががん体験を手話で語ってもらった。この際の宣伝は、FACEBOOKのみならず、各地域の聴覚障害者新聞にもその案内を載せてもらった。スマートフォンなどの機器を用いない高齢ろう者にぜひ参加してもらいたかったからである。

H28年には、「菊川れん、医療手話通訳を語る！」という講演会を開催した。医療手話表現、同通訳に詳しい菊川れんさん（ろう者）を招いての講演会である。この際には、周囲への宣伝方法は、フェイスブックにほぼ絞った。実際に行ってみると、その申し込みは思ったより少なく、東京周辺という狭い地域での宣伝には、時期尚早は否めない。

3. 医療動画の配信

医療の分野では、多くの専門用語が使われており、聞こえる人にとってその理解は容易ではない。各病院のサイトでは、さまざまな病気をやさしく解説しているが、その解説はほとんど文章によるものである。ろう者は、手話を主な情報収集手段としている。このため、医療の言葉を正しく理解できないろう者は多い。

今回、3つの病気をとりあげ、やさしく手話で解説した動画を作成した。それをYouTubeという動画サイトに投稿し、多くのろう者に見てもらった。

次の3つの動画を作成した。

- 1) ジカ熱（2016. 7）
- 2) 熱中症（2016. 8）
- 3) ノロウイルス感染症（2016. 11）

★作成手順

事前に病気の解説文原案を作成。

例会時に、その文章をメンバーで確認。

ろう者により手話化。録画。

写真や字幕挿入。

字幕の挿入はその作業に手間がかかるが、手話がわからない難聴者などにも見てもらいたいとの配慮からである。

一本の動画は、1～2分程度の短いものである。手話表現は、手話ネイティブろう者の佐藤八寿子さん（当会メンバー）にお願いした。佐藤さんは、短時間の練習のみで、わかりやすい手話に見事に表現してくれた。

YouTubeにアップ。2017. 1現在の再生回数。

ジカ熱 785回

熱中症 563回

ノロウイルス 163回

字幕挿入が一番のネックになり、作成までには時間がかかる。このため、タイムリーに情報提供するためには、早い段階で作成に入らなければならない。ジカ熱に関しては、リオオリンピック後日本で社会問題になるになると思ったが、実際にはほとんど病気が広がらなかった。一方、熱中症とノロウイルスに関しては、的確に情報を提供できたものと思われる。



写真1：ノロウイルス感染症の動画
下記QRコードの読み取りで、動画が見られます。



ジカ熱

熱中症

ノロウイルス

4. 「聴覚障害者の医療について語ろう」

全国の聴覚障害者や医療従事者と、聴覚障害者医療についての情報交換をするために、上記テーマのFacebookページを2015年1月に立ち上げた。筆者と皆川明子さん（ろう者）の二人が管理人を務める。個人的な病気の話がでることも考慮し、登録した人しか閲覧できない非公開グループとさせてもらっている。参加するには、管理人の承認が必要である。聴覚障害者あるいは手話にかかわる人であれば、原則的に承諾するようにしている。

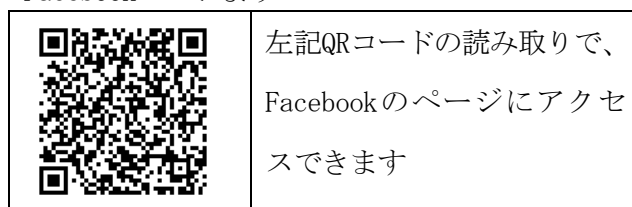
現在の登録者は、753人（2017. 1. 9現在）である。当初は、聴覚障害医療にかかわる医療従事者や、手話通訳者の情報交換の場として考えていたが、実際に開設してみると、3分の2ぐらいが聴覚障害者である。聴覚障害者のFacebook利用者が激増しているのが原因であろう。一方、手話通訳者にはFacebook利用者がまだまだ少ない印象がある。

Facebookを利用することで、インターネット上の様々な情報とのリンクが可能になる。写真2は、「肺がん患者の会」のホームページをリンクしたもので、聴覚障害者に対する癌支援の解説が書かれている。この投稿に対して、28人が「いいね！」ボタンを押し、評価された。また、コメントを付けることにより、自分の意見を書き込むことができる。コメントのやりとりにより、質問も意見交

換も可能である。シェアをすることにより、その人のページにもリンクが貼られる。より多くの人の目にとまることになる。多くの人がシェアをすればするほど、その情報は容易に多くの人に広まっていく。このリンク機能こそが、Facebookを用いる利点である。



写真2：「聴覚障害者の医療について語ろう」のFacebookページより



5. まとめ

ろう者にとっては、手話による情報提供がもっとも望ましい。地元で、医療について精通していて、手話ができる人と言うのはかなり限られた存在である。今後も、SNSを最大限に活用し、全国の聴覚障害者に医療情報を提供していきたい。



第3回聴覚障害者医療研究集会抄録集

発 行 2017年2月

編 集 聴障・医ネット 代表幹事 平野 浩二

〒263-0016 千葉県稲毛区天台3-11-1 高田方

FAX: 043-251-1975

E-mail: deaf.mednet@gmail.com